

「石川県同和教育研究協議会結成宣言」

私たちは、今ここにそれぞれの思いを胸に石川県同和教育研究協議会を結成するに至りました。

ある人はこんな思いを語ってくれました。

「私は県外のH市で部落差別の実態を知った。食事をすすめてられて遠慮していると『うちのごはんはんに針でも入っていると思っただけか』と親から言われたり、遊びにいった時『字書けれんから、代わりにがきを書いてくれ』と頼まれたりなど、自分には重い数々の現実であった。私はその言葉の持つ本当の意味も分からず、親しくつきあうことで自分は差別する側ではないと勝手に思いこんでいたように思う。常に自分の『無知』を問い、被差別の生活の中で若くしてなくなってしまう懐かしい人たちの『無念』の顔にどう応えていくかが課題である」と。

「対象地区」が「ゼロ」と言われ、部落が見えにくいと言われているこの石川県においても差別の問題とは決して無縁ではありません。いろいろな形で内なる差別意識が浮上してきます。そんな具体的生活の場で、差別が見えるか見えないかということ

とは、言い換えれば差別の問題に「無知」であるかどうかを一人ひとりが日々の生き方の中で問われていることになるのです。

さまざまな姿になって表出される差別の現象のみにとらわれ、ややもすると本人の「努力の足りなさ」や「能力の低さ」を嘆くことに終始しがちです。その背後にある問題、特に差別の問題にきつちりと目を向けていかなければなりません。

立ち後れの指摘は否めませんが、石川県においても、人が人として生きていくことを損なわせない「同和教育」の研究実践の歩みをさらに確実なものにするために、あらゆる「教育」の現場に携わる者は特に「差別が一番よく見えるところ」に立とうと言うことなのです。人が人と共に生きていくうえでもとになる「人の痛みが分かる」努力をしようということなのです。

部落問題をはじめ一切の差別を問題に対する「無知」から決別し、差別を許さず、人としてともに豊かに生きていくための教育の創造をめざしていくという決意をこめて、ここに石川県同和教育研究協議会の結成を宣言します。

「差別を見抜き、差別を許さぬ同和教育を石川の地に」

一九九一年七月一〇日

石川県同和教育研究協議会（石川県同教）